ニホンタンポポとセイヨウタンポポ(4月の自然庭園では）　～みぬま見聞館トピックス～

このページを印刷する

このページでは大宮南部浄化センター（みぬま見聞館）のトピックスを紹介をします。

ニホンタンポポとセイヨウタンポポ(4月に自然庭園で観察できる動植物について)

桜も開花し、明るさと日差しの強さが感じられる季節となりました。
コロナ禍ではありますが、入学、入社など新しい人生の門出を迎えられる方もたくさんいると思います。
4月は、この時期に道ばた、公園、田んぼのあぜ道などに、かわいらしく咲くタンポポを紹介します。タンポポには、春になって暖かくなるころに花を咲かせる、日本に昔からある在来種のタンポポと、春が来る前の比較的寒い時期から長い期間花を咲かせる、外国に起源を持つ外来種のタンポポがあります。在来種のタンポポは、ニホンタンポポ呼ばれていますが、形状など地域で差があり、様々な種類があります。外来種のタンポポは、セイヨウタンポポと呼ばれています。ニホンタンポポとセイヨウタンポポの見た目の違いは、セイヨウタンポポは、花を包む緑色の部分（外総包片・がいそうほうへん）が下方に反り返っています。一方、ニホンタンポポは、その部分が反り返らないので、花の咲いている時期にみれば、簡単に見分けがつきます。しかし、花が咲く時期以外は、見分けることが困難です。

セイヨウタンポポにニホンタンポポが生育する場所を取られているように見えるかもしれませんが、そうではないかもしれません。セイヨウタンポポは、種子が小さく遠くまで種子が広がりますが、自然環境の豊かな場所での他の植物との競争には不向きで、街中や道端のコンクリートの隙間など、生活に身近なところに多く分布します。ニホンタンポポは、種子が大きく数も少ないため、セイヨウタンポポほど種子の拡散もなく、土手や神社の敷地など、自然の残っている場所で自生し、その姿が見られます。

ニホンタンポポには、カントウタンポポ、カンサイタンポポ、トウカイタンポポなど、いくつかのタンポポがあり、黄色の花を咲かせると思われているタンポポですが、関西には、シロバナタンポポと呼ばれる白い花を咲かせるタンポポが存在します。
自然庭園においては、敷地南側通路の池近くでカントウタンポポが見られ、セイヨウタンポポは、同じく敷地南側通路や東側広場で見ることができます。黄色い花ですので、少し離れた場所からでも、すぐに見つけられます。
これからの時期、スミレ、シュンラン、ニリンソウ、ヒトリシズカなどの草花、そして、ツマキチョウ、モンシロチョウ、ナミアゲハ、アオスジアゲハなどのチョウも見られるようになります。ぜひ、みなさんで春の自然庭園にお越しください。

セイヨウタンポポ
花の下の緑色の部分が反り返っています

ニホン（カントウ）タンポポ
花の下の緑色の部分の反り返りはありません

タンポポの綿毛
ズームアップした写真ですが、キレイですね！

シロバナタンポポ
名前のとおり白い花のタンポポですね

シュンラン
花がひっそりと咲いています

ニリンソウ
仲良く咲く二輪の可憐な花です

モンシロチョウ
サナギで越冬し早春から姿を見られます

ナミアゲハ
みぬま見聞館でもつい先日羽化しました

日本の国鳥「キジ」(5月の自然庭園では)　～みぬま見聞館トピックス～

このページでは大宮南部浄化センター・みぬま見聞館のトピックスを紹介をします。

日本の国鳥「キジ」(5月に自然庭園で観察できる動植物について)

日差しが一年で最も強い時期になり、樹木も青々と成長を続けています。今回は、日本の国鳥のキジを紹
オスは濃い緑色の綺麗な羽を持ち、尾が長く、鳥としてはかなり大きく全長80センチメートルほどで、メ
地味な体をしています。大きな体のせいか、飛ぶのが苦手なキジですが、走るのが早く時速30キロメート
では感じ取ることが出来ない地震の初期微動を感知できる能力も持っているそうです。
野生動物は、人間とは違う成育環境の能力を持ち合わせていて、それを上手く使いながら、命をつないで

キジのオスは顔に特徴があり、繁殖期となる今の時期にはハート型の顔になって、「ケーンケーン」と鳴
羽を力強く羽ばたく「ほろ打ち」をして縄張りも主張しているとされています。自然庭園では、昨年4月
の虫や草の芽などを食べていました。とても居心地がよかったのか、近づいてもあまり逃げる様子がなく
スの方は、警戒心が強く飛び立ってしまうこともありました。今年も何度かキジを目撃しましたが、つか
た。

キジは昔から人と一緒に生活してきた親しみのある鳥で、見沼たんぼ周辺にもたくさんのキジが縄張り争
ます。また、童謡でお馴染みの「桃太郎」にもキジが、家来としてお供する話は、昔から人間の生活を助
でしょうか。

いま自然庭園の池の水面に映る、咲き誇ったエゴノキの花が初夏を感じさせてくれます。ほかにもナミア
コントラストが、日差しを受けてとてもきれいに映し出されます。これからは自然庭園には、そういった
でお越しください。

キジのつがい
昨春、自然庭園で過ごしていたときの様子です

キジのオス
目の淵のハート型が際立ちます

キジのメス

地味な色ながらキレイな模様をしています

エゴノキの花

一斉に花が開き、後にたくさんの実がなります

ナミアゲハ

サナギで冬越しした個体がいま飛び交っています

モンシロチョウ

土手に咲く菜の花などでたくさん見られます

アカハライモリのフェロモン(6月の自然庭園では）　～みぬま見聞館トピックス～

このページを印刷する

このページでは大宮南部浄化センター（みぬま見聞館）のトピックスを紹介をします。

アカハライモリのフェロモン(6月に自然庭園で観察できる動植物について)

見沼たんぼには水がはられ、自然庭園では、木漏れ日が心地よい日が続いています。
今年は、暖かい日が続いたこともあり、梅雨を待ちわびるかのように、例年よりも早く季節の草花が咲き始めています。また植生の変化に伴い、昆虫や鳥たちも多く姿を見せるようになってきています。今月はみぬま見聞館内に入って、すぐ右手で見ることのできるアカハライモリについてお話をさせて頂きます。

アカハライモリは、有尾目イモリ科イモリ属に分類される両生類の仲間で、古くから広く日本に分布していたこともあり、ニホンイモリと呼ばれることもあります。埼玉県のレッドデータブックでは、ごく近い将来に絶滅する危険性が極めて高いカテゴリーである絶滅危惧1Ａ類にランクされる貴重な生き物です。イモリは水辺付近に生息することから、井戸や田んぼを守るという意味で、イモリと呼ばれているそうで、家を守るとされているのがヤモリになります。イモリは、古くから強壮薬や惚れ薬として使われてきた歴史があり、今でも一部の地域で夕食の御膳に黒焼きが並ぶことがあります。

近年、そんなイモリの求愛行動における「フェロモン」に関する研究結果が多く報告されています。オスは、繁殖期に入るとその体を婚姻色と呼ばれる色に尾などを変化させ、ひらひらさせるとともに、ソデフリンと呼ばれる物質を肛門線から分泌することで、メスに精いっぱいのアピールをします。実はこの行動、メスが分泌するアイモリンと呼ばれる誘引活性物質に刺激されたことで反応しているのだそうです。また、このフェロモンの名前の由来は日本最古の和歌集、万葉集にあるそうです。
ソデフリンは、額田王（ぬかたのおおきみ）が歌った**「茜（あかね）さす　紫野（むらさきの）行き　標野（しめの）行き　野守（のもり）は見ずや　君が袖（そで）振る」**の歌から、アイモリンは、大海人皇子（おおあまのみこ）が、その返事として歌った、**「紫**（むらさき）**の　匂へる**（におえる）**妹**（いも）**を　憎く**（にくく）**あらば　人妻**（ひとづま）**ゆへに**（ゆえに）　**我恋ひめやも**（われこいめやも）**」**の愛しい人を指す「いも」なのだそうです。そんなロマンティックな命名をした科学者の感性にも心がひかれます。

他にもアカハライモリには、人に害を及ぼすような量ではないものの、フグで有名なテトロドキシンと呼ばれる毒があります。おなかの赤い色は警告色（警戒色）と呼ばれ、俺に近づくと危険だぜとアピールしていると言われています。普段は周りを寄せ付けようとはしないくせに、恋の時期を迎えると色気付き、一生懸命女性にアピールをするけれど、実はすでに女性のほうからその気にさせられていた。なんとなく人間臭さを感じるのは私だけでしょうか。
こんな愛らしいイモリに興味を持った方は、是非一度、みぬま見聞館に足をはこんでみて下さい。
さいたま市の豊かな自然と、ここで命をつなぐ様々な生物と触れ合うことができると思います。

アカハライモリ
館内1Fロビーで保護しています

アカハライモリ
よく見ると愛嬌のある顔をしています

アカハライモリの幼生

ギンヤンマのヤゴ

この春、当館で生まれました	学校のプールから救出し、館内1Fに展示しています
 オオムラサキの幼虫 もうすぐ美しい蝶の姿が見られることでしょう	 スズムシの幼体 昨秋産みつけられた卵から生まれました
 コバンソウ 自然庭園の通路脇のあちこちで見られます	 ユウゲショウ 小さな赤い花がたくさん咲いています
 カワセミ 自然庭園にときどき顔を見せてくれます	 シジュウカラ 「ツピッ」という鳴き声をよく耳にします

強かなテントウムシ(7月の自然庭園では）　～みぬま見聞館トピックス～

このページを印刷する

このページでは大宮南部浄化センター・みぬま見聞館のトピックスを紹介をします。

強かなテントウムシ(7月に自然庭園で観察できる動植物について)

梅雨明けが待ち遠しい時期となりました。
今月は、テントウムシについてお話しさせて頂きます。日本には180種類ほど確認されていて、代表的なナナホシテントウ・ナミテントウ・アカホシテントウなど、皆さんもよく目にすることと思います。大きさは3～5ミリメートル程の小さくて可愛らしい容姿の昆虫ですが、とても強かな生きものです。
例えば、天敵から襲われたときは、体の脚から独特の苦くて異臭のする液体を分泌し、敵を追い払います。また羽に襲い掛かる敵には、羽の表面で滑らせて攻撃を防除する優れた体を持ち合わせています。
そして、テントウムシはどれも自然界でとても目立つ色をしています。冬の間は物陰に隠れていますが、昼間の活動期に危険が及んでも、身にまとっている赤と黒や、黄色と黒などといった色使いで、毒を持つ生き物であると主張して、他の生き物に警告しています。

昆虫の大半は冬を越せずに死んでしまいますが、冬でも活動できる能力があるナミテントウは、越冬できる数少ない昆虫です。
テントウムシを漢字で書くと「天の道の虫」と書き、太陽の方向に飛び立つ縁起の良い虫として昔から親しまれてきました。植物につくアブラムシが大好物で、害虫駆除の手伝いをしてくれる人間にとっての益虫です。
良く知られているナナホシテントウの寿命は短く、だいたい2カ月ほどです。卵から成虫になるまで約20日で成長し、成虫になると1カ月ほど卵を産み続けて一生を終えてしまいます。

私たちの日常の生活圏で生息しているので、葉の裏や植え込みに近づくと容易に発見することができるので探し出し、観察してみてはいかがでしょうか。
自然庭園にもたくさんのテントウムシが暮らしています。皆様のお越しをお待ちしています。

ナナホシテントウ
よく見かけるテントウムシです

ナナホシテントウの幼虫
幼虫もアブラムシを食べてくれます

テントウムシのタマゴ

テントウムシのサナギ

オオニジュウヤホシテントウ

カメノコテントウ

ナミテントウ
よく見かける模様のナミテントウです

ナミテントウの幼虫
いかつい感じです

ナミテントウ
オレンジ一色ですがナミテントウです

ナミテントウ
黄色に多紋ですがこれもナミテントウです

万葉の和歌にも残るツユクサ(8月の自然庭園では）　～みぬま見聞館トピックス～

このページを印刷する

このページでは大宮南部浄化センター（みぬま見聞館）のトピックスを紹介をします。

万葉の和歌にも残るツユクサ(8月に自然庭園で観察できる動植物について)

自然庭園では、梅雨も明け本格的な暑さを迎える中、火照った体に、水をたたえた田圃（たんぼ）と芝川を渡ってくる風が涼しく感じられる日々が続いています。
今月はみぬま見聞館の自然庭園の中でひっそりと咲いているツユクサについて、お話をさせて頂きます。

ツユクサは、ツユクサ科に分類される、2枚の青い花びらと、黄色の雄しべが目立つ、独特な形をした一年草で、一つの株に、雄しべと雌しべをもつ両性花（りょうせいか）と、雄しべしか持たない雄花を併せ持つ珍しい植物です。ツユクサという名は、露をよく身にまとっていることに由来しているともいわれ、花は早朝に開花し、午後にはしぼんでしまうことから、ホタルグサ(蛍草)、ツキグサ(月草、着草)、アオバナ（青花）などの別名を持ち、はかないものとして、たとえられることが多い植物です。
学名のCommelina communis（コメリナコムーニス）は、オランダの植物学者ヤン・コメリンとその甥の植物学者カスパル・コメリンに由来します。
コメリン家には3人の植物学者がいましたが、1人は早くに亡くなってしまい後世に名を残すことができませんでした。このことが、ツユクサの青色に目立つ2枚の花びらと、目立たない白い1枚の花びらに似ていることから、フランスの植物学者シャルル・プリュミエがこの名をつけたのだそうです。花言葉の「なつかしい関係」もこの逸話に由来するといわれています。
英語名のDay flower(デイフラワー)も、「その日のうちにしぼむ花」という意味からきているそうです。

ツユクサの青色は、アントシアニンと呼ばれる色素で、園芸種であるオオボウシバナの花弁からとった汁で染めたものが「青花紙」（あおばながみ）という製品になり、これを水に浸した青い染液は、水ですぐに消えてしまうことから、友禅などの染め物を作る際の下絵に用いたりします。
また、ツユクサで染めた着物は、水で色が落ち易いことから、現存する最古の和歌集でもある万葉集にも、恋に関わる移ろいやすい気持ちや、はかなく散ってしまう不安な心のうちを、ツユクサになぞらえた歌が多く詠われています。中でも私の好きな歌2首を紹介したいと思います、いずれも詠み人知らずで一つが、
「月草(つきくさ)の、借（か）れる命にある人を、いかに知りてか、後も逢（あ）はむと言ふ」
という歌で、「ツユクサのように、はかない命の私たちなのに、また後で逢いましょうなんてどうして言うのですか。」という意味です。もう一つが、
「百(もも)に千(ち)に、人は言ふとも、月草(つきくさ)の、うつろふ心、我（わ）れ持ためやも」
という歌で、「なんだかんだと周りの人は言うけれど、私の想いは一途で、ツユクサのような移ろい易い気持ちではありません。」という意味です。
ちょっと弱気な思いを詠った歌が多い中、後の一句は、変わらぬ強い気持ちを詠った歌なのですが、実際、ツユクサは、その見た目に反し、種の発芽率が高く、地中の深いところからも発芽できるうえ、芽が出てしまうと根を抜いても残った分から再生してしまうなど、繁殖力がとても旺盛な農家泣かせの植物でもあります。
さらに、開花時に乾燥させたものは、オウセキソウ（鴨跖草）と呼ばれる生薬で、煎じたものを解熱や利尿、感冒、熱性の下痢などに、砕いたものは化膿止めの外用薬（がいようやく）として用いられます。また、食用としてサラダなどに使われることもあるそうです。

ツユクサは、道端などでも普通に見かける植物ですが、ときにはエアコンのきいた室内をはなれ、蚊などの虫に対する対応をしたうえ、心地よい風が通り抜ける、みぬま見聞館の自然庭園で、万葉集などの図書を片手に、身近な自然を眺めながら時間（とき）を過ごしてみてはいかがでしょうか。

ツユクサ
青い花びらが目に留まります

エノコログサ
「ねこじゃらし」と言った方がピンときますね

アサザ（絶滅危惧2類（VU）種）の花
キレイな黄色の花が見られます

ヤブカラシとマメコガネ
ヤブカラシの小さな花にマメコガネがやってきました

アブラゼミ
鳴き声に夏の暑さを感じます

カブトムシ
食事中なので樹液に夢中です

カナヘビ
自然庭園の通路などあちこちで見られます

ゴマダラカミキリ
カラダを動かすと独特な音が聞こえます

アオサギ
飛び立った姿をとらえました

カワウ
電柱の先端で休憩しているようです

日本の固有種ニホンイシガメ(9月の自然庭園では）　～みぬま見聞館トピックス～

このページを印刷する

このページでは大宮南部浄化センター・みぬま見聞館のトピックスを紹介をします。

日本の固有種ニホンイシガメ(9月に自然庭園で観察できる動植物について)

残暑厳しい毎日ですが、今回は数少ない日本の固有種のカメについてお話しさせていただきます。
「固有種」とは、その地域に古くからいる在来種のうち、その国や地域にしかいない生物のことをいいます。現在、日本の固有種のカメは「ニホンイシガメ」と「リュウキュウヤマガメ」の2種類が確認されています。少し前までは「クサガメ」も固有種と認識されていましたが、DNA鑑定などにより江戸時代に中国や北朝鮮から持ち込まれた外来種の可能性が高いといわれています。そのため、本州ではニホンイシガメが唯一の固有種とされています。

ニホンイシガメは、甲羅が黄土色で、甲羅の後ろの縁がギザギザしており、尾が長いのが特徴で、川や池、水田などに生息しています。大きさは10～20センチメートルほど、寿命は40年ほどと長生きな爬虫類です。雑食性で、昆虫、魚類、両生類のほか植物の果実や葉、藻など様々な物を食べます。害虫も食べてくれるので、人間にとってはありがたい生きものですが、近年はペットとしての乱獲や河川改修による生息環境の変化、ミシシッピアカミミガメ等の外来種との生存競争など、様々な影響により個体数が減少しているとの報告があります。

ミシシッピアカミミガメやカミツキガメなどの外来種は、飼育などの商業目的で大量に輸入されてきたものが、飼い主の都合で自然界に放されて野生化し、繁殖して個体数を増やしてきました。
ニホンイシガメが年2回の出産で一度に約10個産卵するのに対し、ミシシッピアカミミガメは年3回で一度に約20個産卵するので、繁殖力の面からみただけでもニホンイシガメは厳しい生存競争にさらされていることがわかります。

ミシシッピアカミミガメなどの外来種に限らず、生きものをペットとして飼育する場合は、最後まで責任をもって飼い続けることが大切です。
そういった個人の取り組みが、ニホンイシガメをはじめとする日本の固有種を守ることにつながります。

みぬま見聞館では、玄関のところで3匹のニホンイシガメを保護しています。
その愛嬌のあるすがたを、ぜひご覧になってください。皆さまのお越しをお待ちしています。

ニホンイシガメ
甲羅のキール(隆起)は1本です

ニホンイシガメの甲羅
写真左が後縁でギザギザの特徴がよくわかります

ニホンイシガメ
愛嬌のある顔をしています

ミシシッピアカミミガメ
その成長に驚きます

クサガメ
臭亀はエサにもよりますがクサいカメです

クサガメ
甲羅のキール（隆起）は3本です

イロハモミジと紅葉(10月の自然庭園では）　～みぬま見聞館トピックス～

このページを印刷する

このページでは大宮南部浄化センター（みぬま見聞館）のトピックスを紹介をします。

イロハモミジと紅葉(10月に自然庭園で観察できる動植物について)

自然庭園では、真夏の暑さも和らぎ、柔らかな木漏れ日のなか、季節の終わりを寂しがるかのように、様々な虫たちの声が一段とにぎやかになってきています。今月はみぬま見聞館の自然庭園の中で、秋の訪れを教えてくれているイロハモミジと紅葉について、お話をさせて頂きます。

イロハモミジは、ムクロジ科カエデ属の落葉木で、自然界では福島県より西に分布する樹木です。イロハカエデやタカオカエデなどの別名で呼ばれるほか、伊豆の踊子・琴姫・涼風など多くの園芸種があり、全国の公園等にも植樹されています。
イロハモミジは、4月から5月に5mm程度の小さな暗褐色の花を咲かせた後、翼に果実の果と書くヨクカと呼ばれるプロペラのような2枚の羽をもつ独特な形の種子をつけるようになります。この種子の殻には、アブシジン酸と呼ばれる、発芽を抑制する物質が含まれ、発芽までの時間を稼ぐことで、独特な形状と合わせて、より遠くへ生活圏を広げることができるのだそうです。

また、イロハモミジは、紅葉の艶やかさから、多くの芸術作品に登場しています。平家物語では、源氏の白旗に対して、合戦で敗れた平家の赤い旗の色がモミジとして描写されていますし、巻第六では、第80代天皇の高倉上皇の人柄を示すくだりで、大好きな庭の紅葉が激しい風で散ってしまった後、庭掃除を行った使用人が、お酒を温めるため、散ったモミジを焚火にしてしまったが、咎めることはせずに、唐の詩人である白楽天の「林間に酒を温めて紅葉を焼く（タク）という歌になぞらえて、風流だとほめていたとの記載があります。この歌は、仲の良い友達が故郷に帰っていくのを見送るときにうたったとされていますが、紅葉を見るとなんとなく心が落ち着き、故郷に戻って来たような気持になるのは、田舎暮らしを経験した私だけでしょうか。

さて、秋の紅葉といえば、このイロハモミジの赤色がまず頭に浮かぶかとは思いますが、紅（ベニ）とかく書く紅葉のほかにも、黄色の葉と書く黄葉（オウヨウ）や褐色に変わる褐葉（カツヨウ）などがあります。でも、そもそも木々はなぜ紅葉するのでしょうか、ちょっと気になったので調べてみました。
結論を先に言ってしまうと、紅葉は葉が落ちると書く、落葉の準備段階であり、秋になり気温が低く日照時間も短くなると光合成の効率が下がり、葉が生産する養分の量が消費する量を賄えなくなるため、植物は省エネでの生存を選択し、葉の根元と枝の間に離層と呼ばれるコルク上の物質を生成し葉を落とすのだそうです。
本来、葉は、葉緑体に含まれる光合成色素であるクロロフィルによって緑に見えています。ところが、葉の中で分解と再生を繰り返していたクロロフィルが、分解だけ行われるようになると、もともと葉の中にあったカロテノイドと呼ばれる色素が強調されるようになるため黄色くなます。さらに離層が形成されると、葉で作られた養分のブドウ糖が葉に蓄積され、紫外線によりアントシアニンが生成されるため赤くなるのだそうです。イロハモミジでは、クロロフィルの分解が、葉の表側にある（柵状）組織から起こり始め、葉の裏側に近い（海綿状）組織では遅くなるので、緑色から茶褐色、そして赤色へとグラデーションのように変わっていくのだそうです。
ちなみに、気温が日中20度から25度、朝晩8度以下と寒暖の差が大きく、適度な水分や十分な日射しなどの条件が重なると、きれいな紅葉になるそうです。

自然庭園では、イロハモミジの他にも、コナラやサクラ・コブシなど、多くの植物が、様々ないろどりを身にまとい、訪れる方をお待ちしています。
紅葉を迎えた庭園で、虫たちのささやきを聞きながら季節の移り変わりを楽しむ、そんなひと時をお過ごしに、ぜひ足を運んでみてはいかがでしょうか。

イロハモミジ
秋が深まるにつれ紅葉が進みます

イロハモミジの花
春先にひっそりと咲きます

イロハモミジの実(種)
プロペラ様の羽でより遠くへ飛ぼうとしています

綿花の花
これから実になり種を纏う綿がはじけます

ヌスビトハギ
種はひっつき虫になります

ヤマハギ
紫色の可憐な花です

キツネノマゴ
よく見るとキレイな花をたくさんつけています

コムラサキの実
キレイな紫色の実がたくさんつきます

コバネイナゴ
稲刈り前の田んぼでよく見かけます

ショウリョウバッタ
今の時期、巨大に成長したものも見られます

モズ
小柄ですが猛禽類、クチバシや目線が鋭いです

ダイサギ
羽を広げるとその大きさに驚きます

紋付を纏うジョウビタキ(11月の自然庭園では）　～みぬま見聞館トピックス～

このページを印刷する

このページでは大宮南部浄化センター・みぬま見聞館のトピックスを紹介をします。

紋付を纏うジョウビタキ(11月に自然庭園で観察できる動植物について)

日一日と秋が深まりつつある今月は、渡り鳥のジョウビタキについてお話をさせていただきます。
ジョウビタキはスズメ目ヒタキ科の鳥で、オスの体は鮮やかな橙色(だいだいいろ)で頭部が銀色のとても綺麗な鳥です。反対に、メスの体は尾にかけて薄い橙色の羽があり、羽に白い紋を持っていますが、全体として地味な色合いをしています。ジョウビタキだけでなく、キジやクジャクなど、オスが鮮やかな色彩を、メスが地味な色合いを持つものは、鳥の世界でも数多く存在しているようです。
名前の由来ですが、「ジョウ」は銀髪の意味で、「ビタキ」は鳴き声が火打石の音（ピッ・ピッ・ガッ・ガッ）に似ていることからこの名がついたようです。ジョウビタキは別名「紋付鳥(もんつきどり)」と言い、その由来は、オス・メスとも羽に白い紋を持ち、特に、オスは黒い羽に白い紋が着いていることから和服の紋付袴(もんつきはかま)に例えられたとされています。

ジョウビタキは、チベットや中国東北部で繁殖し、冬になると日本に渡ってきて、日本にいる春先までの間にパートナーを探すこともあるようです。越冬中のジョウビタキは単独で行動し、縄張り意識がとても強いことが知られています。

た。オスの姿は違う場所で見かけましたが、その様子がつがいで縄張りにした自然庭園を守っていたように思えました。また縄張り意識の強さは、時にミラーに映った自分を外敵と間違えて攻撃してしまうこともあり、実際にその様子を観察したときは何が起こっているのか不思議に思いました。
野鳥の寿命は、一般的に平均2年程ですが、ジョウビタキは4～5年と言われ、野鳥としては長生きな方です。仮説として、縄張り意識が強く、群れを作らない習性が、外敵から見つかる可能性を減らしているからかもしれません。

これからは渡り鳥の大移動が始まる季節となります。コガモやヒドリガモなどの渡り鳥が芝川の放流口にたくさん集まってきます。去年はみぬま見聞館脇の芝川の土手にオオバンが70羽程集まり、餌を探していた時期もありました。
みぬま見聞では園内において、双眼鏡の貸し出しも行っていますので、これからの季節に是非バードウオッチングを楽しんでみてはいかがでしょうか。
皆さまのお越しをお待ちしています。

ジョウビタキのメス
羽に白い紋が目立ちます

ジョウビタキのオス
黒い羽に白い紋が映えます

ジョウビタキ
鏡に映った自分を必死に追い払おうとしています

みぬま見聞館脇の芝川の様子(冬)
コガモなどたくさんの渡り鳥が集まります

みぬま見聞館脇の芝川の土手
オオバンが群れを成していました

ヒドリガモ
クチバシの水色が目印になります

凛として佇むツワブキ(12月の自然庭園では）　～みぬま見聞館トピックス～

このページを印刷する

このページでは大宮南部浄化センター・みぬま見聞館のトピックスを紹介をします。

凛として佇むツワブキ(12月に自然庭園で観察できる動植物について)

立冬を過ぎ、自然庭園では、朝毎に冷気が加わるようになり、小春日和に心安らぐ日々が続いています。
今月は、みぬま見聞館の自然庭園の中で、多くの草木の開花が途切れるこの時期に、黄色の鮮やかな花を咲かせるツワブキについて、お話をさせていただきます。
ツワブキは、葉(ハ)が蕗(フキ)に似ていて艶(ツヤ）があるため、艶の葉の蕗が転じてツワブキになったともいわれています。フキという名がつくものの、キク科に属する植物で、崖や海岸などの岩場に自生する身近な植物です。古くから若い葉や茎を佃煮にしたり、刻んだものを油でいためるなどして食材にする他、葉を蒸し焼きにしたりあぶったものが、火傷、痔などによく効く民間薬として利用されてきました。
また、小説「舞姫」の作者である森鴎外の出生地で、西の小京都と呼ばれている島根県の津和野町は、ツワブキの野に由来するともいわれています。

ツワブキの花言葉には、「先見の明」とか「困難に負けない」、控えめなさまを表わす「謙譲」などがありますが、春を告げる梅やサクラソウよりもずっと早く、鮮やかな黄色の花を咲かせる姿は、春という未来を見通す能力にたけているイコールまさに「先見の明」なのかもしれません。
ちなみに、ツワブキと明るいという字を見ると、江戸時代末期の曹洞宗の僧侶で、歌人でもあった良寛和尚が歌った、「山里の草のいほりに来て見れば　垣根に残るつはぶきの花」という一句を思い出します。現代語訳すると、山里の小さな草ぶきの家に来てみると、ツワブキの黄色い花が垣根に咲き残っていたとなるのでしょうが、質素な生活を送っていたとされる良寛和尚にしてみると、冬の寂しい庵でも、ツワブキの花が咲く垣根だけは、明るく輝いて見えていたのかもしれません。

2つ目の花言葉「困難に負けない」も、冬という一見白黒の季節に、鮮やかに咲き誇る黄色の塊は、一筋の光のように見る人の心の中まで明るく照らし、もう一度頑張ろうという気にさせてくれる、そんな場面からきているのかもしれません。
さて、ツワブキはキク科の花と言いましたが、キク科の花はとても面白い構造をしています。一般的にキク科の花は、小さな花がたくさん集まった、頭(アタマ)の状態の花に順序の序と書く頭状花序(トウジョウカジョ)と呼ばれる塊が一つの花に見えています。花びらのように見える一枚一枚は、それぞれベロの舌の状態の花と書く「舌状花(ゼツジョウカ)」と呼ばれ、中心の芯のように見える部分は、筒の状態の花と書く「筒状花（トウジョウカ）」と呼ばれています。また、花だけをつける茎を花の軸と書いて「花軸（カジク）」、先端の花が付く部分を花の床と書いて「花床(カショウ)」または「花托(カタク)」と言います。ちょっと、複雑になってしまいましたが、ツワブキの花をよく見てみると、花びらのような花と筒のような花の集まりになっていて、ほかのキク科の花と比べるとその隙間はやや広めに空いているのがお分かりになるかと思います。冬にもかかわらず艶のある緑色の葉と鮮やかで大きな黄色の花、でも本当は小さな花の集まりで、花同士は決して自己主張せず適度な間隔を開けて凛として佇んでいる、なんとも日本人的な奥ゆかしさを感じませんでしょうか。
3つ目の花言葉の「謙譲」もぴったりかなと思います。

最近では葉に黄色の斑点模様が付く「星班(ホシマダラ)」や白色の縁取りの「覆輪（フクリン）」、縁が縮れた「獅子葉（シシバ）」など、いくつかの園芸種も販売されていますが、日陰でひっそりと鮮やかな黄色の花を身にまとい、あたりを照らしている、そんなつつましやかなツワブキを一目見てみたいと思いましたら、みぬま見聞館の自然庭園に、暖かな装いの上、ぜひ足を運んでみてはいかがでしょうか。

ツワブキ
鮮やかな黄色い花が目に留まります

ツワブキの黄色い花
小さな花が集まり、凛として佇みます

ヤツデ

冬の間の貴重な花と蜜です

ヤツデの花

改めてよく花を見ると不思議なカタチに思えます

ヒドリガモ

みぬま見聞館脇の芝川に渡ってきます

オオバン

こちらも芝川に渡ってきてたくさん集まります

オカヨシガモ

芝川に渡ってきます、ここでは少なめです

カルガモ

自然庭園の池にも時々姿をみせます

コゲラ

小さなキツツキですが、突く姿は堂々としています

ヒヨドリ

自然庭園で飛び交い、池で水浴びする姿も見られます

メジロ

今から新緑が芽生えるまで姿や声で楽しませてくれます

モズ

高木のてっぺんにその姿をよく見かけます

しゃもじのような嘴のハシビロガモ(1月の自然庭園では) ～みぬま見聞館トピックス～

このページを印刷する

このページでは大宮南部浄化センター・みぬま見聞館のトピックスを紹介をします。

しゃもじのような嘴のハシビロガモ(1月に自然庭園で観察できる動植物について)

冬本番となり1年でもっとも寒い時期となりました。自然庭園では、生き物達が寒さに負けず力強く生きています。今月は、寒さをものともせずに川や池などで生活するカモの仲間ハシビロガモについてお話をさせて頂きます。

ハシビロガモは、しゃもじの形をしたとても大きな平たいくちばしを持っています。進化の過程で他のカモとは違う成長をしたと言われています。大きさは50cm位程のカモです。オスは頭が緑、胸は白、腹や脇は赤褐色でとても綺麗な色合いをしています。メスは褐色で比較的地味ですが、くちばしはオスと同じで、大きく平たいくちばしを持っています。
くちばし内部にあるブラシ状の歯のようなもので、くちばしを水面につけながら進み水中のプランクトンなどの餌を探します。このようにハシビロガモは、水に潜らずに採食する水面採餌性のカモの仲間で、ほかにカルガモやオシドリなどがいます。その中でもハシビロガモは、時につがいや群れで採食するときに水面上でグルグル回りながら渦を造り、泳ぐ足の動きで、餌となるものを浮き上がらせて効率よく採食するという独特な行動をすることもあります。
また、水に潜って採食する潜水採餌性のカモの仲間もいて、キンクロハジロやミコアイサは見沼田んぼの地域でも観察できます。
カモは餌の取り方で体つきにも違いがあり、水面採餌性のカモは体つきが水面を動き回りやすいよう舟形ですが、潜水採餌性のカモは体つきが水に潜りやすいように流線形をしており、それぞれ餌が取りやすいよう進化してきたようです。

さて、ハシビロガモのオスは、メスに求愛する繁殖期に綺麗な色合いになりますが、同じ仲間にマガモ、オカヨシガモ、オナガガモなどがいます。それらは、繁殖期が終わると羽の色が変わりエクリプスという全体的に地味な羽になることで、天敵に見つかりにくい姿となります。
ハシビロガモなどは、そのエクリプスを繰り返すことで、少しでも長く生き延びようとしています。
そんなハシビロガモの寿命は10年程と比較的の長生きな方ですが、カモの生態はまだ、分からないことが多く興味の尽きない鳥ですね。

自然庭園では、葉を落とした木々にジョウビタキ、ツグミ、アオジ、シメなど渡り鳥が集まって来ています。バードウォッチングがお勧めです。寒さ対策をしてお越し下さい。
みぬま見聞館では双眼鏡の貸し出しもしていますし、事前予約をしていただければバードウォッチングのご案内も申し受けます。
皆さまのお越しをお待ちしています。

ハシビロガモのオス
しゃもじのようなクチバシが印象的です

ハシビロガモ
頭の緑色がキレイですが、何を・・・

ハシビロガモのオスとメス
クチバシ以外は違う鳥のようです

ハシビロガモのエクリプス
オスは徐々に羽の色が変化していきます

みぬま見聞館の自然庭園にいたカルガモ
ハシビロガモと同じ水面採餌性です

潜水採餌性のキンクロハジロ
羽の色が鮮やかで緑色や紫色に見えます

ツグミ
木の上だけでなく地面に佇む様子も良く見られます

アオジ
自然に溶け込み見つけるのがタイヘンです

シメ
独特な体系とキリっとした顔をもっています

みぬま見聞館脇を流れる芝川の様子
毎年冬にたくさんの渡り鳥が集まります

日本最大のサギ類、アオサギ(2月の自然庭園では)　～みぬま見聞館トピックス～

このページを印刷する

このページでは大宮南部浄化センター・みぬま見聞館のトピックスを紹介をします。

日本最大のサギ類、アオサギ(2月に自然庭園で観察できる動植物について)

みぬま見聞館の自然庭園では、まもなく立春(2月4日)を迎えようとしているにもかかわらず、厳しい寒さが続いていますが、木々に芽吹くつぼみを見ると、春の足音が近づいているのを感じることができます。
今月は、みぬま見聞館の2階、いとなみゾーンから望むと、芝川沿いに見かけることの多い「アオサギ」について、お話をさせていただきます。
アオサギはサギ科に属し、全長は約95センチメートル、翼長は180センチメートルにもなる日本では最大級の大きさの鳥です。体の上半分が青灰色(アオハイイロ)で、腹と頭の色は白く、額の横から目の上を通り後頭部まで続く黒い帯模様と、長い首の黒い縦線模様が特徴的です。この長い首は、眠るときや飛翔時には折りたたまれるため、岸辺で首をたたんで、じっとしている姿は、別の鳥のようにも見えます。鳴き声は、グワーまたはグァンという低い大きな声で、飛翔中に鳴くことがよくあります。きわめて大きい鳥ですが、高い木の上に巣をつくり、集まって繁殖することが普通です。
食べ物は、主に魚類や両生類、爬虫類、甲殻類で、時には小鳥のヒナやモグラなども食べることがあるそうです。

アオサギや同じサギ科のゴイサギは、白いほかのサギ類とは違い、昼間だけではなく夜にも行動することが知られています。この行動と飛翔している時の絶叫にも似た鳴き声のせいか、アオサギは妖怪じみた伝説として昔から多く語られてきました。
鎌倉時代に書かれた「吾妻鏡」(アズマカガミ)の中では、サギが集まっているのは何か良くないことが起こる前触れではないかと、陰陽師に頼る場面がありますし、江戸時代には鳥山石燕(トリヤマセキエン)の、妖怪を描いた画集『今昔画図続百鬼』(コンジャクガズゾクヒャッキ)の中に、アオサギが青白く不気味に光って描かれた「青鷺火(アオサギビ)」という絵があります。また、同じく江戸時代、桜川慈悲功(サクラガワジヒナリ) の著書『変化物春遊』(バケモノハルアソビ)にも、大和国(ヤマトノクニ)(現・奈良県)で化け柳と呼ばれる柳の大木に青い火が現れ、人々が恐れているといった話や、新潟県佐渡島新穂村(ニイボムラ)(現・佐渡市)で、お寺の梅の木に怪しげな火が毎晩飛来し、弓矢で射たところ、正体はサギであったなどいう伝説があります。
さらに、日本では子供を身ごもりながらも亡くなってしまった女性の霊であり、中国では幼子をさらっていく妖怪とされる姑獲(ウブメ)は、アオサギのことではないかとかと言われています。
実際、私も夜半過ぎに埼玉県の田園地帯を車で通り抜けていく際に、数羽のアオサギがまとまって行動している姿を見たときは、その大きさにちょっと恐怖を覚えたことがありました。

一方で、俳句や短歌の中では、アオサギは川辺で見かけることが多いせいか、穏やかな風景の一部として歌われることが多く、松尾芭蕉や小林一茶、与謝野蕪村、正岡子規、北原白秋、与謝野晶子など、多くの著名な歌人が題材として歌っています。
また、合唱曲としても歌われる更科源蔵(サラシナゲンゾウ)の「蒼鷺」(アオサギ)という詩(ウタ)の中では、地に足をつけ佇(タタズ)むアオサギを、北海道を開拓した人々の忍耐力にたとえていたりします。
ちなみに、怪談の「雪女」や「耳なし芳一」の作者でもある小泉八雲(コイズミヤクモ)ことラフカディオ・ハーンの家紋は、故郷のアイルランドも日本でもサギだったそうです。
春も間近なころを「春隣」(ハルトナリ)と言うそうですが、ちょっと怖い、でも大きくてきれいなアオサギを探しに、春隣を迎え、暖かな気配がどことなく漂う、みぬま見聞館の自然庭園を訪れてみてはいかがでしょうか。

アオサギ
首を伸ばすと大きいことがよくわかります

アオサギ
首をたたんだ様子です

アオサギの飛ぶ姿
大きな羽根をひろげるとホントに大きいです

アオサギ
冠羽も立派です

ダイサギ
みぬま見聞館脇の芝川でよく見かけます

カワウ
この電信柱がお気に入りの場所みたいです

バン
オオバンに比べて数は少なめです

コガモ
羽根の緑がキレイです

イソシギ
1月の野鳥観察会で出会いました

シジュウカラ
胸のネクタイ様と背中の緑がかわいらしいです

自然庭園付近に在るオオタカ(3月の自然庭園では）　～みぬま見聞館トピックス～

このページを印刷する

このページでは大宮南部浄化センター・みぬま見聞館のトピックスを紹介をします。

自然庭園付近に在るオオタカ(3月に自然庭園で観察できる動植物について）

日射しが暖かくなってきた今月は、食物連鎖で頂点に位置するオオタカについてお話をさせていただきます。
オオタカは、タカ目タカ科に属し、北海道から九州の低山にかけて分布する、日本では代表的な猛禽類です。ちなみに猛禽類は、鋭い爪と嘴を持ち、他の動物などを捕食する習性のある鳥類の総称です。
オオタカは、近年、全国的に目撃例も増えつつあり、平成29年には国内希少野生動植物からは解除されました。ただ、埼玉県のレッドデータブックでは絶滅危惧種2類に分類されています。大きさは、オスが体長約55センチメートル、メスが約60センチメートルとメスのほうがやや大きく、翼を広げた翼開長は130センチメートル程になります。飛ぶ速さは、平均では時速約80キロメートルですが、捕食のため急降下をするときには時速140キロメートルにもなるそうです。
体の色の特徴としては、オスは、上面は青色かかった濃い灰色で、下面は白く細かいしま模様があり、はっきりとした白い眉斑（びはん）を持っていて、メスは上面が茶色がかった濃い灰色をしています。通常はアカマツに営巣し、高さ10～20メートル程の位置に約1メートルの直径を持つ巣を作ります。

オオタカは、筋肉質の太い脚と鋭い爪を使って空中で獲物を捕まえるほか、待ち伏せをして背後から襲い掛かって獲物を捕らえることもあります。主にハト、ムクドリ、スズメのほか、ウサギやネズミなどの小動物も獲物にします。
自然庭園でも、近年オオタカの目撃回数も増え、食事をする場所になっているのか、オオタカがむしったと思われるハトの羽がまとまって落ちている光景が、たびたび見られるようになりました。
1月のある日、自然庭園で木の陰から物音が聞こえたので目をやると、オオタカが鋭いかぎ状の嘴で力強く獲物の肉を引きちぎって食べている場面に遭遇し、写真に収めることができました。残酷にも見えますが、食べ物を口にできなければ生きていくことができず、命が途絶えてしまいます。
あるときは、カラス5羽とオオタカ1羽が対峙する様子を見ることができました。動じることなく堂々としていて、風格を感じとることができました。みなさんも、自然庭園を訪れたとき、運よくこのような光景に出会えるといいですね。

みぬま見聞館では毎年野鳥観察会を開催しています。今年1月に開催した野鳥観察会では、埼玉県生態系保護協会の研究員を講師として迎え、自然庭園から芝川沿いを講師の解説を交えながら歩きました。その道中、約2時間のあいだに29種類もの野鳥と出会えましたし、帰り道ではオオタカが20羽程のハトの群れを襲っている光景も見ることができました。しかしそのオオタカは、幼鳥だったのか最後はカラスの反撃にあい、逃げて行く様子も見られました。オオタカは食物連鎖の頂点にいますが、最大の天敵はカラスで、雛が襲われることもあります。自然界の厳しさを感じますね。

みぬま見聞館では、野鳥の観察に役立つ双眼鏡の貸し出しも行っていますので、ぜひ自然庭園にお越し下さい。職員一同、皆様のご来館をお待ちしております。

オオタカ
鋭い目つきが印象的です

オオタカ
胸の縞模様もキレイです

オオタカ

後ろ姿も絵になります

オオタカの食事のあと

自然庭園でときどき見かけます

チョウゲンボウ

みぬま見聞館付近でもときどき見かけます

タシギ

この冬は芝川の浅瀬で見ることができました

エサを狙うカワセミ

自然庭園の池で虎視眈々と狙いを定めていました

コガモのオス

起こしちゃったかな？！